

ことろことろにおける「鬼」と「親」の関係性—子を喰らう餓鬼の考察を通して—
(東京都スポーツ鬼ごっこ連盟・大田区スポーツ鬼ごっこ連盟) 小田島あやめ

キーワード： 仏教学、餓鬼、ことろことろ

■研究目的

本発表では、田村正彦「続・子を喰らう餓鬼—凶像の流布とその概念—」を題材に子を喰らう餓鬼とことろことろの「鬼」と「親」の関係性について考察し、「鬼」への見識を深めることを試みるものとする。

1. 餓鬼について

仏教ではこの世に生きている全てのものは6種類に分類され、下等なものから順番に「地獄」「餓鬼」「畜生」「阿修羅」「人」「天」に分類される。一般的な「餓鬼」は手足がやせほそり、腹部が膨れている見目で描かれることが多い。地下の浅いところに生息しており、いつも腹が減っているため、食べ物を求めているが食べ物を食べようとするとその食べ物が燃えてしまい、口にすることができない。現世で欲深い人は、次の世で「餓鬼」に生まれ変わるとされている。本発表で取り扱う「子を喰らう餓鬼」とは自ら生んだ子を食べてしまう餓鬼である。

2. 子を喰らう餓鬼に関する説話

田村正彦氏によると、日本での子を喰らう餓鬼の受容のされ方には以下の3点に分類することができるという。

- ①脳を食らう餓鬼と一緒に語るもの
- ②阿毘達磨論書の四句の偈を引用するもの
- ③餓鬼の代表として扱うもの

また『撰集百縁経』には子を喰らう餓鬼の説話が登場する。田村氏はこの経で子を喰らう餓鬼が語られる理由として「悪因悪果という仏教の基本的な理念を語る方便として、子を喰らう餓鬼が登場するのである」として説明している。その説話は以下の内容である。

—那羅達多が王舎城で乞食をしていた時、一日一夜に五百の子を産み、それを食う餓鬼に出会ったことから話は始まる。この餓鬼の因縁は仏によって明らかにされ、ある長者の婦人であった時、先に妊娠した第二婦人を流産させ、「もし私が犯人なら、来世で自分の子どもを食べる報いを受けましょう」という誓いを立てた故に、今その応報に苦しんでいる—『撰集百縁経』より

ここに「苦しんでいる」と記述されているように、子を喰らう餓鬼は子を生んだ母親としての母性と、餓鬼であるが故に子を食いたいという衝動との狭間で常に揺れ動いている存在であるため、その苦しみは想像に難くない。ここでは、子を喰らう餓鬼が母親として

の愛情と餓鬼としての欲望を持つ存在であることを確認して次に進むこととする。

3. ことろことろと子を喰らう餓鬼の考察

ここまで子を喰らう餓鬼について簡単に述べてきたが、ここからはことろことろに登場する「鬼」と「親」の関係性について、これまで述べたことも踏まえながら考察していく。

ことろことろとは日本古来から存在している鬼ごっこであり、約 1300 年前には存在していたとされる。このことろことろには「鬼」「親」「子」の3つの役割があり、「鬼」が一番後ろの「子」を奪おうとするのを「親」が盾になって「子」を守る遊びである。この「鬼」が仮に子を喰らう餓鬼だとすると、「親」はどういった存在に当たるのだろうか。

私は餓鬼として自ら生んだ子を食いたい、もしくは食べてしまうという悲しい存在が「鬼」であり、子を生んだ母親としての愛情を表す存在が「親」ではないかと考える。つまり「鬼」と「親」は別々のものでなく、表裏一体の存在なのである。子を喰らう餓鬼は本来自分が子供を食いたいと思って食べているのではなく、前世の行いの報いとして、子を食べる餓鬼として現世に生まれている。子を生んだ母としての愛情と餓鬼として子を食いたいという欲望が子を介してせめぎ合っていると考えると、本来三すくみの構造からなる鬼ごっこがまた違って見えるのではないだろうか。一見単なる子供の遊びに思えることろことろも実は奥深い世界観を表しているといえる。

参考資料

田村正彦『古典文学論叢』「続・子を喰らう餓鬼—凶像の流布とその概念—」,
文藝談話会, 2009年.

一般社団法人鬼ごっこ協会公式ホームページ内「鬼ごっこの文化と歴史」

(<http://www.onigokko.or.jp/cn39/pg105.html> 2019/8/3 閲覧)